連載「プロマネの現場から」
第１９９回　「まなパタ」・・“大人の学び”のヒント

蒼海憲治（大手 SI 企業・グループ会社・事業部長）

今年も半年間の研修を終えた新人たちがプロジェクトの現場に配属されました。いよいよ実戦になりますが、業務プロセスや業務マナー、ソリューションやツール等については、引き続き、ゼロから学ぶことになります。受け入れるプロジェクトチームとしても、新人の持つ若々しさやエネルギー、新しい視点は、中堅やベテランにとっても大きな刺激になっています。特に、２年目の社員にとっては、これまでの新人気分が吹っ飛び、今一度、仕事に真摯に向き合うようになっていると感じています。ところで、新人や若手が学びを継続するのはもちろんですが、彼らを指導・フォローする立場の中堅やベテランにとっても、学びを継続することの大切さは変わりません。といいつつ、「魔の時代」と呼ばれる３０代から４０代、定年が延びたことで５０代は、足元の仕事が回せるようになっているがゆえ、かえって新しいことに取り組む必要性を感じない傾向にあると思います。リスキリングという言葉を聞かない日もなくなりますが、はたして好奇心を持ち続けるのはどうしたらよいのでしょうか。

大人にとって継続して学び続けることのヒントとして、今回は、独立行政法人情報処理推進機構（以下、IPA と略）が 2022 年 6 月に公開した「大人の学びパターン・ランゲージ」（略称・まなパタ）」（＊）を紹介したいと思います。

「まなパタ」は、大人になっても学び続けている 12 名の学びの実践者の方々ににインタビューを行い、その考え方や工夫、課題を抽出・整理し、抽象化することで、『大人の学び』に必要な“種”と呼ばれる要素約 750 個を整理し、30 の「パターン」に分類しています。「パターン・ランゲージ」とは、成功している事例やその道の熟練者に繰り返しみられる「パターン」を抽出し、抽象化を経て、言語化して共有するための手法です。一般的に勘、センス、経験則と呼ばれる実践知を互い分かりやすい言葉にまとめています。

「まなパタ」では、大人が学ぶためにはどのように取り組めばよいかという「考えるヒント」を、
A.出会いや気づきを楽しむ（マインド）
B.自分を大切にしたデザイン（学び方）
C.自分と学びのブラッシュアップ（実践）
D.知のシェアリング（コミュニティ・社会）
の 4 つのカテゴリに分け、さらに 10 のグループ、30 のパターンに整理しています。

「まなパタ」では、パターンごとに見開きページで解説されており、30 のパターンから自分にあったものを読むことで、自分が学び続けるための課題や解決方法を知ることができるようになっています。
左ページには、「パターン」を考える時や会話の時に使いやすくするために、パターン名（言葉）をつけられています。また、言葉の理解を助け、内容がイメージできるように「イラスト」がついています。
右ページには、このパターンの「状況」と、この状況に当てはまるときの「問題」、問題がどのような要因で生じているかが「フォース」として記載されています。そして、問題を解決するための「アクション」が、解決策の具体例として書かれています。

「A1 実はそこにある」から「D6 わたしの学びは人類のバトン」までの 30 のパターンの中には、「A2 縁カウンター」「A5 キワをせめる」「B8 苦手解消ハック」など、「それって何？」と思えるネーミングに思わず目を止めてしまうものもあり、どんな問題状況があり、それはなぜ起きてしまうのか、また、そのような時、どう行動したらよいのか、その結果、何がもたらされるのかが 1 枚のカードにまとめられています。

IPA が推奨する活用例として、個人の学びの改善ツールとして利用するだけでなく、組織において、育成担当者としてのヒントや題材としての使用が想定されています。

以下、個人的に興味を持ったパターンを、いくつか紹介したいと思います。

最初は、パターンのネーミングで目を止めた、「A2 縁カウンター」です。
副題に、「偶然の出会いを楽しむ」とありますが、私たちは、日々の生活を送っていますが、この状況において、「自分の興味関心だけに目を向けていると、いつの間にか自分自身で世界を狭めてしまい、様々な楽しみの可能性を減らしているかもしれない」という状況に陥りがちです。
ややもすれば、いつもの場所で、いつものメンバーとだけ過ごす、コンフォートゾーンに埋没しています。そこで、コンフォートゾーンの外に出る。または、様々な機会を捉えてコンフォートゾーンを拡大していくことが大切になります。
「これまで関心のなかったことであっても、来るもの拒まず受け入れてみることで、偶然の出会いや新しい価値観に触れてみる。」
そうすることによって、「自分ではたどり着けなかったであろう思いも寄らない出会いが増え(セレンディピティ)」、また、「出会いを通して、自分の枠がどんどん広がっていくことで、楽しみの幅も広が」ります。

２つ目は、「A4 もやもやをコトバに」になります。

日々の忙しい中で、「なぜそうなっているんだろう?」など、ふと疑問に思うことがあっても、解消しないまま時間だけが過ぎていきがちです。

その原因は、「常識やルールがあると絶対視してしまい、それを変えることはできないと思い込んで、諦めがちである(マジョリティに流される)。」また、「なんとなくわかったつもりになって、疑問に蓋をしがちである」ためです。

そのような時は、「そこで
モヤモヤを感じたことやわからなかったことを放置せずに、何でも言語化する」こと。

そうすることで、「いままでぼやっとしていた疑問や違和感の輪郭が、少し明確になる。疑問や違和感に対して、言葉を使って思考する（具体化· 抽象化など)ことができるようにな」ります。

特に、新しいプロジェクトに参画したり、組織を異動になって感じたことが大切だと感じています。疑問や違和感を言語化し、ピン留めすることで、これまで経験してきたたことも、再認識できるようになるからです。

3 つ目は、「B1 学びの道は自分が起点」です。

与えられた学びには、「やらされ感」がつきまといます。

「学びに対して受け身な姿勢だと、やらされ感を感じてつまらなくなってしまったり、自分にとっての意味を理解できないまま進んでしまったりして、結果として身につかないということが起きてしまう」からです。これまで、「なぜ、何のためにそうするのか」をあまり考える必要がなかったからかもしれません。

そこで、「あくまで学ぶことの主体は自分にあると捉え、自ら考え・選び・動くようにする」こと。

たとえ「人に言われたことでも、やる· やらないという判断は自己責任で考え」、また、「何か学ぼうとする時は、必ずその背景や目的を確認し、それに対してこれからやろうとしていることやそのやり方が合っているかを必ず考えるようにする」こと。

その結果、「目の前にある課題に対して、より自分で考え、判断· 行動できるようになる」し、「他の誰でもない自分自身が、自分の人生をコントロールしていると考えられるようにな」ります。

最後のパターンは、「D6 わたしの学びは人類のバトン」になります。

今あるほとんどの学びは、先人たちの積み上げてきた学びの系譜にあります。しかしながら、「今の時代の自分たちのリターンのみを考えた行動をしてしまいがち(自然環境に配慮しない、など)」です。

そこで、「学ぶということは、社会や人類の進化に寄与する大切なものだと考え」てみる。

その結果、「様々な人に支えられていると全てに対して感謝することができるようにな」り、「世代へ知識や希望というバトンをつないでいくことができる」ようになるといいます。

自分一人だけであれば、「あと何年で定年だから、いまさら」という気持ちになるかもしれませんが、「バトンをつないでいく」という気持ちになると、いくつになっても、年齢に関係なく、新しいことに取り組めるようになると思っています。

（＊）大人の学びのパターン・ランゲージ（略称まなパタ）
https://www.ipa.go.jp/jinzai/skill-transformation/henkaku/manapata.html